

学びのプラン

（授業案）

高等部 1 年 「国語科」

「クロスワードの世界へようこそ」（全 11 時間）

子どもが学びの主体となり、学びを深め、広げる授業
～「協働的な学び」と「個別最適な学び」を基盤として～

授業者
場 所

A～C の欄については、一般的な指導案の児童生徒観、教材観等、従来長い文章で表していたものを、簡潔に図式化したものと捉えていただけるとよいと思います。

前期・後期シート

授業構想時

A 実態（実態個票、日々の見取りから）

- ・問題を作るのが好き。
- ・好きなワードがある。
- ・スリーヒントクイズを既習。
- ・文章は自分で書ける。

B 教科実態確認表から 扱う領域 = 習得させたいこと

- ・書くこと
- ・聞くこと・話すこと

具体的なデータで根拠を明確にしています。
同時に教科の内容と系統性を意識します。

子どもの実態（生活経験、興味関心）が出発点です。「面白そう」「やってみたい」「できるかも」の思いは指導内容ありきでは生まれないと考えます。

使える知識＝概念化につなげます。

C 同一のテーマや教材 = 前のめりになるネタ ≠ 「〇〇を比べよう」などの同一課題の一斉指導とは違います。

クロスワードの世界へようこそ

生活のどこにつながるか

- ・物事を多角的に捉えて、相手に伝わるように詳しく説明する力がついてほしい。
- ・クロスワードの楽しさを余暇にもつなげたい。

D 単元計画

1～2 教時	つかむ	3～9 教時	広げる	10～11 教時	深める・まとめる
・クロスワードのやり方を知り、自分で解く。		・個々で問題を作ってみる。 ・友達同士で出題し合う。 ・友達とペアになって問題を作る。		・身近な教師に出題し感想をもらう。 ・もらった感想をもとに自分たちの作った問題について自己評価し、発表する。	

E 子どもの特性と、単元で自らつかむ学習課題（問い・気付き・感情）

生徒 A		
・思いついたことを自分の言葉で表現しようとする。	⇒	・好きな言葉だから、解いてもらいたいな。
・書きたいことを自分なりにまとめる。	⇒	・うまくできたかも。先生や A I に確認したいな。
生徒 B		
・表したいことや伝えたいことを知っている表現を組み合わせ文に表す。	⇒	・どうかな。これで伝わるかな。
・脱字が多いが、すらすらと思いついたことを書く。	⇒	・間違いがないか読み直してみよう。書いた文を友達に読んでもらおうかな。

E 子どもの特性と、単元で自らつかむ学習課題（問い・気付き・感情）

生徒 C		
・自分の思いを言葉にしたり文に表したりする。	⇒	・よし！これでいこう。あれ？伝わらないなあ。
・難しい言葉や漢字を使ったがり、自分なりに正しく表記しようとする。	⇒	・漢字で書きたいから辞典で調べよう。
生徒 C		
・教師に相談しながら課題を進めようとする。	⇒	・アイディアが浮かばないな。先生に確認したいな。
・知らないことを聞いたり、辞書を使って調べたりする。	⇒	・問題文を作るヒントが欲しいな。辞典で調べてみよう。

子どもたち一人一人の授業に関わる実態を捉え、どのような課題をつかむかをあらかじめ予想し、個別の支援につなげます。

F

〈はたらきかけの工夫〉

- ・友達の得意な部分を認め合い、ペアで協力できるよう仲立ちをする。
- ・問題文を作る過程を楽しめるよう、うまくできたことや工夫したことを称賛しながら進める。

〈教材・教具の工夫〉

- ・興味関心をもってクロスワード作りに取り組めるよう、正解が自分の好きな言葉（食べ物やキャラクターなど）になるようにする。
- ・友達と協力することで完成できるように、2人で1つのクロスワードを作るようにする。
- ・必要なとき言葉を調べられるように、実態に合った辞典（国語辞典、言葉辞典）を準備する。
- ・良い問題文になっているかどうかを A I（Gemini）に出題して確かめるようにタブレット端末を用意する。
- ・問題文作りに悩んだときは、修飾語（色、形、大きさなど）を加えて文が作れるようにスリーヒントメモを用意する。

〈環境設定の工夫〉

- ・友達同士で教え合ったり、協力し合ったりできるよう、2人組のグルーピングにし、席を隣り合わせにする。
- ・お助けグッズ（辞典、スリーヒントメモ）を使いたいときに使えるように、大テーブルに準備しておく。
- ・問題文を作りながら出てきた工夫をメモに残し掲示しておく。

（別紙）
本時の目標
にリンク

E から予想される、個別の支援、環境設定の工夫等の部分です。一人一人の個別最適な学びの出発点となります。当然、授業が進むたびに支援も変わっていきます。

G 単元目標

	知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
生徒 A	・知っている言葉を説明する短い文を適切な表現で書く。	・集めた材料の中から、書くことを選んだり整理したりして、詳しく表現する。	・思いついたことや考えたことを文に書こうとする。
生徒 B	・誤字脱字（濁点）に気を付けながら、知っている言葉を説明する文を書く。	・相手に伝わる文になっているかどうかを読み直して判断しながら、誤字脱字に気づく。	・書いた文を相手に伝わりやすい文になっているかどうか確認しようとする。
生徒 C	・知っている言葉について相手がイメージできるような説明の文を書く。	・書いた文が相手に伝わるかどうかを友達に尋ねて判断し、表現を工夫する。	・読みやすく相手に伝わりやすい文を書こうとする。
生徒 D	・知っている言葉を説明する短い文を適切な表現で書く。	・形や色、大きさなどの情報を加えながら、詳しく表現する。	・友達の考えを聞いたり、疑問に思ったことを質問したりしようとする。

H

G 一人一人の実態に合った目標が、同じ活動の中で設定されます。

これからの社会は「きまりきった答え」を求められる社会ではありません。予測不能な社会を豊かにたくましく生きていくには「最適解」を追究することがメインとなります。「最適解」を追究するにあたり、人の自然な学び方が「協働的な学び」となります。ですので、目標は別々ですが「共に学ぶ」こととなります。

生徒 B

生徒 A

生徒 D

生徒 C

- ・国語辞典
- ・スリーヒントメモ

単元スタート

J 児童生徒の姿（それぞれがつかんだ課題、会話、対話、考えの交流など）

1～2 教時	つかむ	3～9 教時	広げる	10～11 教時	深める・まとめる
生徒 D：なぞなぞを解くみたいで おもしろい。 生徒 B：分かったと楽しい。 生徒 A：おもしろい問題にチャレン ジしたい。 生徒 C：クロスワードを作ってみ よう。		生徒 B：「オレンジ色のフルーツ」だ けだと答えがたくさん出てきてし まう。 生徒 D：問題の文が分かりづらいと解 けない。 生徒 A：「スーパー戦隊」と「スーパ ー銭湯」が似ているから、詳しく説 明する言葉を加えないと。 生徒 C：作ったクロスワードをお互い に解いてみたい。			

教師の意図せぬところから、子どもたちは学びの起点をつくり、広げ深めることが多々あるかと思います。子どもたちとの「対話」を通して、時に予定していた内容を変更していくことも考えられます。教科の見方考え方を働かせて、思考判断しながら学びを深めていけるように、児童生徒の姿をその都度捉え、子どもに合わせて授業を進めるための欄となります。子どもの姿を読み取り、より充実した活動につなげたいと考えます。

K 学習の成立、深まり、広がり

- ①コーディネーター、ファシリテーターとしての「教師」の手立て・支援
 - ②「個別最適な学び」の手立て

I 指導の個別化 II 学習の個性化

※I については本図 F に具体的に記載。

※②II に関しては I の結果、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等の具体的な場面が出てくると考えられる。

参考資料：『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して』奈須正裕 伏木久始 編著 北大路書房 2024
「子供が学びを深める授業」新潟大学教育学部附属特別支援学校特別支援教育研究会 編著 ジアース教育新社 2018
令和7年度 山形県立鶴岡養護学校 公開授業研究会における東北文教大学 人間科学部 子ども教育学科 特任講師 大谷敦司氏の助言より